

岩田正美著

『社会的排除

——参加の欠如・不確かな帰属』

評者：菊地 英明

はじめに

「社会的排除」概念は、広義の貧困論の系譜に属するものであり、1970年代以降、移民やその二、三世、失業者など、何らかの意味において社会のメインストリームから弾き出された人びとの状況を論ずるに当たって、西欧を中心に用いられてきた。近年、わが国では広義の貧困や不平等、格差について論壇や政治において頻繁に論じられるようになったが、社会的排除概念もそのような文脈の中で2000年代後半以降、急速に広まった。わが国の貧困研究の第一人者である著者は比較的最近までこの概念の使用にきわめて慎重であったが、本書においては、日本の現状分析と政策提言のために、積極的にこの概念を用いる姿勢を見せている。

本稿では、まず本書の構成を概観し、その後、内容をめぐって若干の考察を加えることとした。

本書の構成

本書は現代社会のキーコンセプトを取り上げたシリーズのうちの一冊であり、序章・一～六章・終章の8章構成を取る。このうち、序章～二章では欧州における社会的排除概念の検討、三～六章ではわが国における社会的排除過程の

分析、終章では日本の社会政策へのインプリケーション——より望ましい社会的包摂政策のあり方——が検討されている。

序章「社会に参加するということ」では、本書を通じたキーワードである「帰属」と「存在証明」が提示される。人は何らかの社会関係に参加＝帰属することで自らの存在証明を行うが、近代の消費社会化によって、社会関係に参加できるかどうかが不安定になった。ヨーロッパでは、特定の人びとを社会関係の外に追いやろうとする構造が社会的排除と呼ばれ、本書ではこの概念を用いて、日本社会の現状分析を行おうとする。

第一章「『社会的排除』とは何か」では、フランスとイギリスでの議論の検討を通して、社会的排除概念を解きほぐそうとする。この概念は多義的であるが、本書においては「主要な社会関係から特定の人びとを締め出す構造から、現代の社会問題を説明し、これを阻止して『社会的包摂』を実現しようとする政策の新しい言葉」として定義される (p.12)。社会的排除が生じる先進国共通の背景として、1980年代以降のグローバリゼーションとポスト工業化の二つが指摘される (p.32)。その結果、「社会の分裂→新しい社会問題→福祉国家の限界→社会的排除」という図式が生じたのである (p.36)。

第二章「社会的排除 vs. 貧困」では、社会的排除と貧困・差別・孤立といった概念との関係や相違を整理する。社会的排除概念のメリットとして、第一に、社会の中の個人、すなわち参加と貧困との関係について問うことができる。そのことによって、例えば社会への帰属の欠如が、その人の貧困を招き、そのことでさらに社会への帰属を失っていくという、貧困と排除との因果図式を明らかにできる (p.49)。第二に、「社会そのものを問う」こと、すなわち「排除の主体を織り込んだ排除のプロセス」を

問うことができる (p.51)。

第三章～第六章では、わが国における社会的排除の典型的な事例であり、1990年代以降顕在化したホームレス（路上ホームレスとネットカフェ・ホームレス）について、そこに至る経路・類型や、排除のあり方の変化・転換、さらには排除された人びとが見えづらくなるメカニズムについて論じる。

第三章「社会からの『引きはがし』と『中途半端な接合』」では、わが国における社会的排除の過程や類型が提示される。第一に、「引きはがし」（あるいは「転落型」）があげられる。これは定職に就き、家族を形成していた人びとに、複合的に絡み合った困難がある時期に集中して襲うことによって、一気に定点（労働・住居など）を失うことを指す。第二に、「中途半端な接合」があげられる。それはさらに、社会への参加がもともと十分に行われていないタイプ（長期排除型）と、住み込みのような不安定な上に失業が即ホームレス化につながる就労状況にあるタイプ（労働住宅型）とに分けられる。かつては引きはがすタイプの排除が主流であったが、近年では中途半端な接合のタイプの排除が典型であり、労働住宅型の排除を受ける人々が多く見られることが明らかにされる。

第四章「若者と社会への『中途半端な接合』」では、ネットカフェ・ホームレスに代表される近年の若年層の不安定化と、そのようなホームレス化が一般の人びとからは見えづらくなるメカニズム (p.82) が明らかにされる。ホームレス化する若者の場合、社会から引きはがされる以前に、雇用の不安定化などの影響によって (p.99)、社会（家族・学校を含む）に居場所・定点を見出すに至っていない、社会への「中途半端な接合」の事例が多い。そのような若者の場合、実家の経済状態も家庭内の関係も良好ではないことが多い。学校でも、いじめの被害や

成績不良などから中退するケースが数多く見られる。

第五章「周縁 地域空間と社会的排除」では、空間的排除と、排除を見えなくするメカニズム、すなわち排除された人びとを引き受け、そこに隠蔽あるいは隔離する特殊空間である「周縁」が論じられる。かつての周縁の典型であった「寄せ場」やその機能は、都市再開発や携帯電話の普及などの背景によって縮小した (p.122)。その一方で1990年代以降、路上ホームレスが増加するとともに、「寮」（労働住宅）・「ヤド」（旅館・宿泊所）・「シセツ」（社会施設）・「ミセ」（ネットカフェ・ファーストフード店など）等の空間が、製造業への日雇い派遣の解禁とあいまって誕生している。また、家庭内への「ひきこもり」や「孤独死」も無視できない程度に存在しているが、これも社会的排除のひとつの形態とみなしうる。

第六章「セーフティネットからの脱落－福祉国家と社会的排除」では、制度からの排除、すなわち国民皆保険・皆年金体制からホームレスが脱落することについての分析が行われている。「引きはがし」を受けたホームレスは、もはや社会保険の恩恵を受けることはできない。また、「中途半端な接合」の若者の場合、初職から非正規雇用であるなどの理由から、社会保険に加入すらしていないことも多い。最後のセーフティネットである生活保護も、稼働年齢層に対しては有効に機能しておらず、受給に際しては深刻なスティグマを伴う、といった問題がある。

終章「社会的包摂のあり方」では、社会的排除の対極にある概念である「社会的包摂」や、それを実現するための政策のあり方について論じる。社会的包摂とは、社会をどう統合し、安定させていくかという戦略に関連する。しかしわが国の従来の自立支援策は、所得保障を伴わ

ない形での就労支援が行われるという問題点を抱えている。このため、単なる労働市場への参加・復帰だけでなく、地域・家族・社会団体などへの社会的包摂への視点をもつべきだとする。その上で、著者は住宅手当（家賃補助）を本格的に導入すること、路上でも住所設定（住民登録）を行うこと、就労支援の実施に当たって所得保障を確実に行うこと、非正規労働や失業した若年者が一人で生きていける基盤を確立すること、を提言する。その上で、一般市民に対しても、現代社会の境界＝周辺部分の諸問題に対して「社会通念」にとらわれずにまなごしを向ける必要性があることを説いている。

考 察

ここで、評者の関心に即して、本書の貢献、及び本書をきっかけに今後さらに我々が考えていくべきことについて、述べることにしたい。

①本書の貢献－日本における「社会からの」排除の過程と排除の隠蔽の過程

本書は、「社会的排除」という観点を徹底しながら、わが国において、これまで広義の貧困としてとらえられてきた現象とその過程について解明したものである。欧州では社会的排除は見えやすい現象である。本書でも簡潔ながら指摘があるように（p.17）、欧州では、戦後の高度経済成長期に迎え入れた移民の二世、三世をはじめ、社会的排除に直面している人びとがいることは明らかであり、彼らの暴動はしばしば国政選挙における大きな争点になってきた。

しかし、わが国では「社会的排除と呼ぶ現象は本当に発生しているのか？」という疑問が出てもおかしくない。このようなありうる疑問に対して、「排除が見えない＝ない」のではないことを本書は説得力のある形で明らかにしている。第一に、（前著『現代の貧困』に引き

続き）わが国でも社会的排除現象が発生しており、それが例えば「労働住宅型」の形をかなりの程度取っていることを、「派遣村」問題の前から明らかにしていたことは重要である。また、中高年と若年との間でホームレス化する過程が決して同じではないことを、「引きはがし」と「中途半端な接合」という図式を用いて鮮やかに描き出して指摘していることも、見落とせない。

第二に、わが国において排除が見えづらくなる原因やメカニズム、について指摘しているところも重要である。わが国の排除の特徴は、家庭内に潜在化したり、様々な施設の中に隠蔽されてしまっているところにあるという。彼らの多くは、社会の周縁にいるが、欧州の移民やその子孫と違って、多くの政治的主張をするわけでもなく、世代間の再生産は行われなかった。だからこそ、通常は政治・政策の場面にはのぼりづらい人の存在や状況だけでなく、隠蔽される「メカニズム」について明らかにすることは、社会科学に携わる者にとってきわめて重要な意義があると思われるのである。

②本書をきっかけに、さらに考察すべきこと－「社会が」排除を行うということ

社会的排除に関する文献では、その原因として、グローバル化や脱工業化（や、それによる雇用・家族の不安定化）があげられることが多い。その指摘は重要だが、それを強調しすぎると、排除があたかも抗いがたい自然現象であるかのような印象を与え、社会が排除を生み出していることや、政策的対応が必要であるという、社会的排除論にとって重要な側面が霞みかねないという問題がある。そのような問題意識から本書を読むと、確かに社会への「帰属」と「存在証明」という観点から社会的排除をとらえるとともに、社会的排除論のメリットとして、社

会そのものについて問うことができることを強調している（＝「社会が」排除を行うこと）ものの、それほど詳細な分析が行われているわけではないように思われる。例えば第三章では、排除する主体はさまざまであるとして、企業、福祉国家、自分自身、貧困といった例が指摘されているが、（6章を除いて）それ以上に突っ込んだ分析は行われていない。前述したとおり、移民を中心とした社会的排除問題が明瞭である欧米と違って、わが国においては、社会的排除の構図がわかりづらい。だとすれば、「社会が」排除しているとはどういうことだろうか。本書の範囲で十分に分析されていることと、今後より深めなければならないこととの両方があると思われるので、以下で指摘したい。

第一に、福祉国家の諸制度の不適合であり、本書第六章で十分な考察が行われている（制度からの排除であると同時に、「制度が」排除している＝そのような制度を放置している我々に対する批判、としてとらえるべきである）。これはリスク社会論でおなじみの論点－リスクを減らすための制度が、かえってリスクを作り出している－とも重なっており、新たな制度のあり方が「社会的包摂」のあり方とともに、終章で示されている。所得保障のないまま、ひたすら労働することを求めるような、よくある社会的包摂論への批判は、きわめて強い説得力がある。

第二に、既に述べたような、問題のある諸制度が持続する原因・過程についての分析である。こんにち、多くの人びとが現在および将来の生活に不安を感じている。そのような不安が実態の有無や程度・深刻さとは別の次元で、「悪者＝スケープゴート探し」につながる可能性があることが、社会的排除論の文脈の中で語られることがある（Young 1999＝2007, 2007＝2008）。すなわち、社会不安が、それをもたらす制度そのものではなく、特定の人びとに向かうことによ

って、冷静な政策的対応が取られにくくなるメカニズムの解明、ということである。本書では断片的に書かれているにすぎないが、ホームレスによる凶悪犯罪のうわさ（p.127）や、母子世帯へのパッシングなどがその典型であろう。また、本書では触れられていないが、ニート（＝働かない若者）やパラサイトシングル（＝結婚しない若者）などの若者に関連するパッシングも社会的排除と関連する現象としてとらえることが可能であろう。社会・経済変動に対して既存の制度や家族観が不適合になっていたとしても、多くの人びとはそのことには気づいていない。その結果、我々が生活の中で無意識・無自覚のうちにとっている行動が、結果的に排除につながりうるのであり、社会によって排除される人びとを出さないために、社会科学による啓蒙が必要となるゆえんである。

第三に、社会的排除問題と少子化問題とを関連づけることによって、わが国のみならず、東アジアの社会政策や家族規範のあり方について、より多くのものが見えてくるように思われる。この指摘は、突拍子もないものに見えるかもしれない。しかし、「福祉国家とリスク」という文脈から、社会的なリスクを管理するために生まれた福祉国家の制度／福祉レジームそれ自体がリスクとなる状況に注目すれば、社会的排除問題と少子化問題とは、リスク社会化によって生じた状況として理解することができるだろう。

本書によれば、近年の社会的排除は家族などの社会関係との「中途半端な接合」と表現することができ、かつかなりの程度家族内にも隠蔽されている。エスピン・アンデルセンは、家族の責任を重んじる福祉のあり方と出生率の低下とが大いに関連する、と述べる（Esping-Andersen 1999＝2000）。

著者は1990年代をホームレスの顕在化の時期

としているが、その時期は少子化問題の顕在化・深刻化の時期とも重なる。1990年の1.57ショックの後、様々な少子化対策が取られたものの、合計特殊出生率は下がり続け、2005年には最低を更新した（なお、少子化は日本のみならず東アジア諸国に共通に見られる現象である）。本稿の範囲で詳細に論じることはできないが、東アジア全体という括りで見たときに、家族イデオロギーや社会政策が、少子化や社会的排除とどのような関係を取り結んでいるのか、ということは非常に興味深い。

おわりに

社会的排除論は、これからの福祉国家・社会政策のあり方を考える上で、今や欠くことのできない視点である。本書が、わが国における社会的排除の問題に関心をもつ全ての者にとっての必読文献とというのは、内容が高度でありながら、記述が分かりやすく、ブックレポートや索引も丁寧に作り込まれているためである。本書の刊行を機に、わが国において社会的排除

論やそれに基づく分析が発展し、よりよい政策実践の模索につながることを祈ってやまない。

（岩田正美著『社会的排除－参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣、2008年12月、ix+206頁、定価1,500円+税）

（きくち・ひであき 武蔵大学社会学部社会学科准教授）

参考文献

Esping-Andersen, Gøsta, 1999, *Social foundations of postindustrial economies*, Oxford University Press (=2000, 渡辺雅男, 渡辺景子訳『ポスト工業経済の社会的基礎——市場・福祉国家・家族の政治経済学』桜井書店)

Young, Jock, 1999, *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*, Sage (=2007, 青木秀男ほか訳『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版)

——, 2007, *The Vertigo of Late Modernity*, Sage (=2008, 木下ちがやほか訳『後期近代の眩暈——排除から過剰包摂へ』青土社)